一般演題：P1-01～P1-20、P2-21～P2-44、P3-45～P3-56

P1-01.
アトピー性皮膚炎にみられる眼合併症の再検討

（眼科）
○山本　香織、若林　美宏、川上　摂子
村松　大弐、阿川　　毅、渡邊　陽子
馬詰和比古、根本　　怜、八木　浩倫
真島　麻子、後藤　　浩
（皮膚科）
沼田　貴史、伊藤　友章、大久保ゆかり
坪井　良治

【目的】 アトピー性皮膚炎（AD）患者の眼合併症の頻度を調査し、過去に当院で行った調査結果（中野ら、日眼会誌 1997 年）と比較することにより、近年の AD 眼合併症の特徴を明らかにする。
【対象と方法】 対象は 2012 年から 2015 年に東京医大病院皮膚科を受診した AD 症例のうち、本研究への参加の同意が得られた 70 例 140 眼（新 AD 群）で、男性 45 例、女性 25 例、年齢分布は 4～60 歳である。問診後に視力、眼圧、細隙灯顕微鏡と眼底検査を行い、AD に関連する眼合併症の有無を調べ、当院で 1991～1993 年に同様の方法で調査した AD 患者 280 例 530 眼（旧 AD 群）と比較した。
【結果】 白内障は新 AD 群が 23 眼 16% で、旧 AD 群の 133 眼 24% と比較して有意に少なかった（$p<0.05$）。網膜および毛様体裂孔は旧 AD 群が 22 眼 4% で、新 AD 群には認められなかったが（$p<0.01$）。ただし、これらの治療歴は 4 眼 2.9% にみられた。網膜剥離は旧 AD 群が 12 眼 2% で、新 AD 群にはなかったが（$p<0.01$）、治療歴は 2 眼 1.4% にみられた。なお、免疫抑制薬であるタクロリムス軟膏は旧 AD 群には使用されていなかったが、新 AD 群では 44 例 63% に使用されていた。
【結論】 AD に伴う眼合併症の頻度は減少していると考えられた。その要因として原疾患に対する啓蒙活動や治療法の進歩、特に免疫抑制薬の外用の影響が考えられた。

P1-02.
糖尿病黄斑浮腫に対するラニビズマブ硝子体注射の長期治療成績

（眼科）
○清水　広之、村松　大弐、若林　美宏
馬詰和比古、八木　浩倫、阿川　　毅
川上　摂子、山本　香織、渡邊　陽子
後藤　　浩
（茨城：眼科）
塚原林太郎、三浦　雅博

【目的】 糖尿病黄斑浮腫（DME）に対するラニビズマブ硝子体注射（IVR）の長期治療効果を検討する。
【対象と方法】 2014 年 3 月から 12 月までに東京医大ならびに東京医大茨城医療センターで DME に対し IVR を行い、12 か月以上観察が可能であった 68 眼について、後ろ向きに調査した。IVR 後 6、12 か月と最終受診時の視力と中心網膜厚、追加治療について検討した。初回注射の後は毎月観察し、必要に応じて再治療を行った。
【結果】 観察期間は平均 19.2 か月（12-27 か月）、IVR 前の矯正視力の平均 logMAR 値は 0.37±0.27 で、治療 6 か月で 0.25±0.21、12 か月には 0.23±0.23 と有意な改善を示し（$p<0.05$）、最終受診時には、0.30±0.28 であった。治療前の網膜厚は 476.5 μm±121.8 で、6、12 か月後、および最終時には 387.2 μm±119.0、367.6 μm±118.5、357.7 μm±116.4 と全期間で有意な改善を示した（$p<0.05$）。治療開始から 6 か月で dry macular となった例は 46% であったが、最終時には 69% となった。2 段階以上の視力改善は、12 か月で 38% の症例で得られた。IVR の回数は、12 か月で平均 3.0±1.9 回、最終時には 3.6±2.9 回であった。なお、経過中に光凝固は 23 眼に、トリアムシノロンテノン嚢下注射は 15 眼に併用された。
　最終時に小数視力 0.5 以上の症例は 66% であった。